



あなたは言った。

「君は何のために、それをしてるの？」

何でもよかった。

ただ夢中になれるものを探してた、

ただ友達が先に習ってた、

それだけの理由で

ピアノに触れてた。

自分には何も無い

そう考えたときの、

当時小学2年生の私には

とても悲しい感覚として

今も少し残る。

普通に考えれば

全然大したことも無い小さなこと。

でも私にとって、

それは大きなこと。

とても大事なことだったんだ。

あなたはまた言った。

「君は何のために、ピアノを弾いてるの？」

私の音に

不快感など出ているのだろうか。

そう思ってしまうほどに

あなたは同じ台詞の繰り返しを

私に遭う度言い続けたよね。

『何の為』

なんて考えもしない。

習い事だから。

自分で行きたいと、

母に言ってしまったから。

「あまり楽しそうに見えないよね？」

「ピアノ、嫌い？」

別に悪意を持って言ったんじゃない。

そんなことは、小さな幼い心にも当然理解されていた。

けれど

何度も、何度も、何度も、

呪文のようにさえ聞こえてきた問いかけに

私は言った。

「うるさい！だまれ！」

次には冷たくなった。

私はこんなことを言ってしまうのか。

自分を抑えられなかったことに

胸と喉の奥らへんが

今度は熱くなった。

違う、そうじゃなくて。

ハッとなった瞬間すぐに付け足そうと

目を瞑り下を向いていた顔を上げたなら

言い放った言葉の意味を、

あなたは多分

分からないフリをしてくれてた。

あなたは笑って

「僕のピアノ、聴いてくれる？」

と言う。

あの優しさは

小さな私にすぐ伝わった

初めて人前で涙が出そうになって

慌ててごまかしながら、

見てあげてもいい。などと

偉そうに言った

顔が熱くなっていくのも止めれずに

あなたの家に行って  
あなたのピアノを聴いて  
初めてピアノの本当の音を聴いた気がしたんだ。

大げさかもしれない。  
小さな子どもの弾くピアノ。

けれど私には十分だった  
私の心を満たすには、  
それは十分過ぎた。

心臓が速く動くのが分かった。  
瞳がその鍵盤をととても軽そうに触れる指を追い、  
身体はリズムを勝手に刻んで、

ピアノと最初に出会った、  
あれ以来感じたことない気持ちを

『はやく弾きたい』

この感覚を取り戻せた自分なんて今はどうでもよくなった

ありがとう、と伝えられない自分に  
歯痒さを感じながらあなたを見つめた日。

その日から私は心を込めて弾くようになった。

「ただ弾くんじゃ駄目なんだよ！  
やっぱり、楽しんで弾かなくちゃ、  
聴いてても全然楽しくないんだよ！」

音は鳴らす者の心を読むのか。

こんな風に当時は思えたのではないが、  
きっと感じていたのだと思う。

あなたの言葉に、私はそう理解したの。

約束をした。

「今度の発表会、君、出るの？」

「うん」

「僕も出るからさ、お互いの良いとこと悪いとこ、  
終わったら言い合いっこしようよ！」

嬉しかった。

「うん！」

あなたはいつも教えてくれていた  
私の前を、私に追い越されること無く、  
常に前を、優しい小さな先生として。

だから私があなただの演奏を  
評価するなんて。  
評価なんて大それた言い方の意味は無かっただろう。

でも、それを駄目だなんて言われてもないけれど  
私にとっては先生から初めて認められた気がした

あなたはいつも  
私のお手本で  
いつも優しくて

どこか密かに、憧れてた。

そんな態度は見せないようにしてたよね。

\*

---

目を細めて見ないと、  
姿が掴めないくらい  
輝いているあなたに  
追いつきたいと思った。

いつか

あなたと同じ位置で  
笑ってみたい。

大きな野望を密かに抱いて  
目指していく。

発表会の当日は  
よく晴れた。

それまで降っていた雨も  
水溜りとなり、その中に太陽を映して、  
この日だけは私を応援してくれた。

そう思わせるくらい  
とても暖かな日差しだった

会場はとても広かった。  
きっと300人も入れはしないホール。  
緊張と幼さの心が創り出した空間では  
不安に押しつぶれそうなほど、広かった。

震える身体を押さえるつもりで首を振った。  
それでもダメで  
膝を抱えて座り込んだ  
それでも震えは隠せなかった。  
泣きそうだと思った瞬間、

このときもやっぱり、  
あなたが先生で良かったって思ったんだ。

「僕もすごい緊張してるんだ。でもすごい楽しみだよ。」

その声が私に向けられてると気付いて、  
その声があなただと分かって  
その声をする方へと振り返った。

どの口が「緊張」などとはざくのか。

先生はいつもと違った格別の笑顔で私を呆れさせて、  
いつの間にか震えは止まっていた。

私は順番で言うと3番目、

先生は最後。トリだった。

大勢いる演奏者の中、

『先生は最後なのか。つまんないな、早く言い合っこしたいのに。』  
そんなことを思いながら発表会のプログラムを見ていた。

思い返してみると、いろんな大人の人が  
私の“先生”に話しかけていた。

きっと期待されていたのだろう。

そんなことを今になって気付く私はつくづく、  
あの頃は“先生”と自分しか、  
その世界の中に居なかったんだなあと  
なんだか可笑しい気持ちにさせられる。

学年順に席に座らされ、  
私と先生は離れてしまった。  
不安に襲われそうになりつつも、  
私は思い出す。

そうして  
あなたのその笑顔がこの気持ちを振り切らせた。

発表会はまもなく、開演される。